

【59】

氏名（本籍）	うち 内	やま 山	ち 知	なり 也	（新潟県）
学位の種類	文	学	博	士	
学位記番号	博	乙	第	25	号
学位授与年月日	昭和	55	年	1	月
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	文芸・言語研究科				
学位論文題目	『隋唐小説研究』				
主査	筑波大学教授	文学博士	牛	島	徳次
副査	筑波大学教授	文学博士	高	村	勝治
副査	筑波大学教授		木	全	徳雄

論 文 の 要 旨

本論文は、中国の隋唐時代の小説の歴史的背景とその代表的な作品・作者の特色を究明することを目的としたもので、全体は次のように構成されている。

序 論

第1章 隋代小説論

第2章 初唐小説論

第3章 盛唐小説論

第4章 中唐小説論

第5章 晩唐小説論

以下、順を追って、それぞれの要旨を説明する。

序 論

内山氏は、まず古来中国で用いられている「小説」という語の持つ意味・用法のあいまいさ、複雑さを歴史的に考察し、結局、本論文では「旧来の習慣的な小説の概念」と西欧流のコント（短篇小説）の概念とを併用する、と規定し、隋唐時代のかかる小説の作者と読者、構成、文体などを概観し、ついで、隋唐小説が文学的研究の対象となった1920年代後期より1976年に至るまでの約半世紀間の内外の研究史の概容を記述している。

第1章 隋代小説論

本章で内山氏は、顔之推と『顔氏家訓』、崔躋とそのグループの諸作品、侯白と『旌異記』等につ

いて考察を加え、この時期の小説の作者は、そのほとんどが六朝以来の名門の出身者か博学の高級官吏で、その作品の多くは、新王朝の尊厳を裏づけようとする、いわば虚構の祥瑞・異物の記録であることを論証している。

第2章 初唐小説論

本章は、唐の高祖より高宗に至る3代、約65年間を対象としたもので、内山氏はまず唐臨の『冥報記』について、これが当時の民間信仰を反映している点、及び王朝の尊厳などとは無関係な態度を表明している点を重視し、それまでの小説に一新生面をひらいたものである、と評価している。ついで、従来その成立年代に関して異説の多い王度の『古鏡記』と無名氏の『補江総白猿伝』について考察を加え、『古鏡記』の作者は「唐王朝の治世を快しとしない消極的な道教信者であって、しかも王氏一族に属する人物」であり、『補江総白猿伝』とともに、その成立時期は「初唐末から盛唐期」と論定している。

第3章 盛唐小説論

本章は、武后より玄宗・肅宗に至る5代、約70年間を対象としたもので、内山氏はまずこの時期初期の張鷟の『遊仙窟』について、これが初唐の遊記『大唐西域記』や『大唐慈恩寺三蔵法師伝』等の影響を受けて作られたものであると論証し、さらにこの作品は、元来は「遊仙窟図」ともいうべき画卷に伴なって書かれた絵物語ではないか、と推定している。また、内山氏はこの期の張鷟の他の作品、あるいは牛肅の『紀聞』などについて、説話と作者との関係を究明し、これらの作品・作品集には、その叙景・抒情表現の細やかさ、豊かさなどの点で、後の中晩唐の小説の先駆と見られるものが少なくない、と論述している。

第4章 中唐小説論

本章は、本論文の中心をなすもので、代宗より文宗に至る7代、約70年間を対象としたものである。内山氏は本章でほぼ作品の成立時期の順を追って、陳玄祐と『離魂記』、沈既濟と『任氏伝』、『枕中記』、許堯佐と『柳氏伝』、李公佐と『南柯太守伝』その他、蔣防と『霍小玉伝』、白行簡と『李娃伝』、沈亜之と『秦夢記』その他、をとりあげ、それぞれ作者の生涯、作品の分析検討、成立年代の論定等に綿密周到な考察を行ない、この時期の作品の文学性の極めて高いことを論証している。

第5章 晩唐小説論

本章は、ほぼ武宗より唐末に至る約60年間を対象としたもので、内山氏はここでは韋絢と『戎幕閑談』、孟榮と『本事詩』をとりあげ、終りに漢文で書かれた「本事詩校勘記」1篇が添えられている。

審 査 の 要 旨

以上が本論文の構成の概容ならびに各編章の論旨の摘要であるが、本論文の学術的価値は、概ね次の二点に要約される。

第一は、本論文はこれまで約半世紀にわたる内外の研究の集大成であると同時に、その体系化をはかったものであり、しかも旧来の諸懸案に対して極めて説得力ある新説を提示し、旧説の不備・欠陥を適切に補正していることである。たとえば、上記の『古鏡記』『補江総白猿伝』や白行簡の『李娃伝』の成立時期の問題など、その代表的なものである。

第二は、本論文は、特に作者の生涯、作品の背景、作品登場人物等について、資料的に徹底した考証を行なっていることである。もちろん、古くは魯迅の『中国小説史略』、劉開榮の『唐代小説研究』、近くは北京大学中文系の『中国小説史』など、それぞれ特色を持ったものも少なくないが、関係資料の博搜、精査という点では、本書は群書にぬきんでている。たとえば、上記の諸作品成立年代に関するものをはじめ、蔣防の『霍小玉伝』の李益に関する考証の精緻さなど、まさに内山氏の独擅場ともいえよう。

世上、中国の文学といえ、詩、特に唐代の詩を知る者は多いが、小説を知る者は極めて少なく、しかも旧白話小説、たとえば『三国演義』『水滸伝』『西遊記』『紅樓夢』等々は知っていても、その濫觴ともいふべき隋唐の小説を知る者は、さらにまれである。これは、単にわが国においてのみならず、中国においてもほぼ同様である。そのため、本論文中で内山氏もしばしば言及しているように、この分野の研究は1920年代後期よりようやく起こり、これまで僅々約50年の歴史を持つに過ぎず、その間の作業の大半は、資料の搜集、文字の校勘、定本の作製等に力が注がれて来たといっても過言ではない。かかる状況と伝統のもとに、内山氏が刻苦して大部の作品と多くの作者の特色を解明せんとして、実事求是の考証に徹して作製した本論文は、今後の内外の研究に益するところ、極めて大といわなければならない。

ただ、内山氏は「序論」において、唐代小説全体にかかわる幾つかの問題を提起しているが、結果的には、個々の作者や作品の考察の結論のみが強調されているような形にとどまり、中国小説史の流れの中における隋唐小説の位置づけが、いまひとつ明確さを欠いているかの感を抱かされる。しかし、これは、一面望蜀の願ひであり、一面将来への期待であって、本論文の価値をなんらそこなうものではない。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。